慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	海外の声
Sub Title	Voices from overseas
Author	西原, 克政(Nishihara, Katsumasa)
Publisher	慶應義塾大学アート・ センター
Publication year	2013
Jtitle	Booklet Vol.21, (2013.) ,p.130- 132
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	Junzaburo Nishiwaki as illuminant 9
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000021-0130

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

海外の声

西原　克政 訳

エズラ・パウンドの書簡

1957年8月21日

作家がどんな文学賞を獲得しようと、それによって、自分の名前の子音の重みが変ったり母音の長さが変るという話は聞いたことはありませんが、もっと現実的な立場に立って考えてみると、日本にもある学士院のような権威ある機関を通じて、西脇順三郎の作品をスウェーデン・アカデミーのノーベル委員会に推薦するのが得策かと思われます。わたしの記憶が正しければ、ノーベル文学賞の栄誉は、まだこれまで日本に輝いたことはありませんから。

エズラ・パウンド
（岩崎良三宛）

1957年10月11日

あなたの国のしかるべき委員会が英断を下されたことを聞き及んで、心から喜んでいる次第です。そういいつつも、残念ながらわたしには読めない日本語で書かれている西脇の作品に関して、私見を述べたり、彼の周囲の作家に関しても全くもって無知ですので、彼の文学的立場を俯瞰して見ることも、おこがましいのは充分承知しております。

しかし、英訳された西脇順三郎博士の作品を見る限り、彼の感受性と教養の深さと広さは、まぎれもない真実です。

あなたの手紙に書かれていたような、わたしよりもっと適任の人たちによって、わたしの憶測が見当はずれでなかったことが立証されて、

嬉しい限りです。西脇の名誉のためでしたら、喜んで推薦状を書かせていただきます。

エズラ・パウンド
（岩崎良三宛）

ジョン・コリアの書簡

1974年10月21日

西脇の近況を知ることができたことは、何にもまして嬉しい喜びでした。心からお礼を申し上げねばなりません。彼は、これまでわたしの人生の50年もの間、わたしのこころの中に、本当に親しい友人であり真に賞賛されるべき詩人として、棲みつづけてきました。彼の詩を最初に読んだときの衝撃とわたしの蒙を啓かせてくれた驚きは、いまもって忘れることができません。わたしは自分の乏しい才能の範囲内で、できるかぎり彼の詩をうまくまねようとしたものです。その経験によって、自分の人生がどんなに豊かになったか計り知れないと、しみじみ思っています。

ジョン・コリア
（新倉俊一宛）

クリストファー・ミドルトンの書簡

2010年1月23日

詩誌『ポエトリ関東』の第25号（2009年号）を送付してくれて、ありがとう。特に、深い感銘を受けたのは、西脇順三郎の「菜園の妖術」の英訳です。

この（明らかに屈指の）翻訳家ホゼア・ヒラタは、この翻訳を小冊子（パンフレット）かなにかで、すでに出しているのでしょうか。タフツ大学におられるようなので、手紙を書いてみます。ともかく、おかげでこの詩にめぐり会えたことを感謝します。「禅」と「ダダイズム」と「スーフィズム」が共謀を図って、ひとつになったような。なんたる精神の深みが横溢していることか。

クリストファー・ミドルトン
（ウィリアム・I・エリオット宛）

訳者註

エズラ・パウンド（1885-1972）は、アメリカ詩人で、20世紀モダニズム運動の詩における中心的指導者であった。西脇の英詩「京都の一月」を読み、深い感銘を受け、書簡にある通り、ノーベル文学賞への推挽を引き受けた。

ジョン・コリア（1901-1980）は、渡英した西脇がロンドンで親しく交わっていたころは、さかんに詩を書いていた。後に、怪奇と幻想を特色とする、異色の小説家として活躍することとなる、独自の世界を切り開いていった。

クリストファー・ミドルトン（1926-　　）は、アメリカ在住のイギリス詩人で、ドイツ文学のすぐれた翻訳家でもある。西脇の「菜園の妖術」を高く評価するのも、彼が深いところで西脇やパウンドと繋がっているからである。

（にしはら　かつまさ・関東学院大学文学部教授／アメリカ詩）